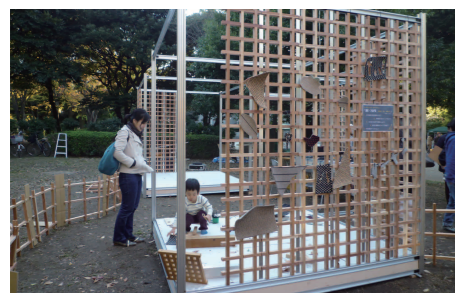


「SMFアート縁日」開催中の3日間、〈ワークショップ・コレクション〉と題して北浦和公園を中心に、さまざまなワークショップが行われました。気軽に参加できるものから、コミュニケーションをとりながら時間をかけて取り組むものまで、バラエティに富んだ内容で、親子から高校生まで、アートを通してそれぞれの世界が繋がり、ひろがるひと時を、楽しみながら体感する場となりました。

「組む・つながる—自在の(き)を楽しむ」

11月21日 北浦和公園

このワークショップはFMミニ放送局のブースの前で行われました。ブースはアルミでできた柱と梁の間に、千鳥格子をはめ込んでつくられています。千鳥格子はお稲荷さんの扉などで時々目にしますが、釘も接着剤も使わないで木の棧を網代のように組みあげた伝統的な木組みの格子で



す。そのミニチュア版を作り、それをつなげてブースの周りに垣根を作って楽しむというワークショップ。集まったのは17、8人で、その面々は小学生が5人とその家族、そしてブースを組み立てた建築学科の学生たちでした。

伝統的な仕事をする大工の藤野利雄さんから継手仕口の話と千鳥格子の組み立て方を聞いて、いよいよ開始。それにしても早かったのは小学生、そのうちの一人はあつという間に四体の格子を組み上げてしまいました。格子の棧の端に切っただけの溝に段ボールなどを挟み、隣りどうしにつなげてゆくのですが、これがなかなかの難問で、右が繋がると左が外れ、向こうで倒れるとドミノ倒しでこちらも倒れる。その繰り返しは何だか社会の縮図を見るようで、垣根がブースの半周を囲うのに案外時間がかかりました。

最後は木材の供給に尽力してくださった材木商の山崎尚さんが得意の競りの実演で締め、楽しいひと時でした。

(三浦清史 / SMF運営委員)

アート制作クリーン大作戦

11月22日 埼玉県立近代美術館サンクガーデン・北浦和駅西口市街 ほか

地域で行われる奉仕活動をアートの制作にすり替えるワークショップ。まちに捨てられたゴミから再生産されたのは、10名の参加者それぞれのユーモアや願いのこもった個性豊かな作品です。そこには一見無意味なもの、無価値なものから新しく価値や魅力を見つけ出し、否定的なものを肯定的なものへと作り換えるアートの眼が働いていました。

他者から規定された目的や価値観に頼らず、自分の力で何かを生み出す経験は、参加者たちの熱意を引き出し、多くの発見をもたらしたようです。気温7度の寒空の下、震えながらも活動に夢中になり、同じ時間を共有した者どうし、通常の工作体験ワークショップでは有り得ない連帯感が生まれました。

その結果、参加者のひとはプログラム終了後の翌日にもイベントに参加し、またあるひとは越谷のアートスペース「KAPL」まで展覧会を見に行き、更に別のひとはダンスチームを率いて同



展覧会を訪れ、展示とダンスのコラボレーションが実現したのです。こうして現在、ワークショップを通じて出会った人どうしの小さな「わっ」がひろがりつつあります。それは企画者も予測していなかった成果ですが、この三日間のイベントを呼び水に、新しく人が出会い、交流し、そこから自発的なアクションが生まれていくという、今年度のSMFの目標を一部達成できたのではないのでしょうか。

(小野寺茜 / SMF事務局)

コピアートペーパーで風の回廊をつくる

11月23日 北浦和公園・彫刻ひろば

秋の日差しがさわやかな北浦和公園の一角で行われたこのワークショップは、コピアートペーパーという感光紙に影を投影し、写真作品を制作するワークショップです。当日はスタッフ18名、参加者約130名で賑やかに行われました。参加者は木々の木漏れ日、手や足など身体の一部、落ち葉や枝などで構成した影を投影し、制作を進めました。親子や友人で協力して影を構成する場面も見られました。制作した作品はトンネルの内壁に次つぎに展示していき、公園を行き来する人たちに活動を発信しました。ワークショップの締めくくりには参加者とスタッフで鑑賞会を行い、完成した「風の回廊」の中を駆け抜けたり、寝転ん



で見上げてみたり、自分の作品を友人に説明したりして、思いおこいに作品を味わいました。

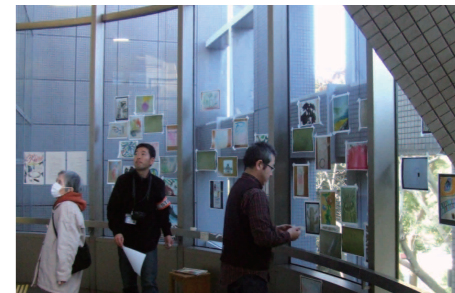
もともと建築図面のトレースに用いられるコピアートペーパーは、光に対する感度が低く、野外での撮影が容易で、現像液や暗室などの特殊な制作環境を必要としません。また撮影時には露光の様子を、アイロンをあてる現像時には影の色の変化を、目で確認できます。そのために参加者はたとえ失敗したとしても、それを活かして新たな工夫をすることもできます。素材の利点や制作環境を活かした造形活動と鑑賞活動が相互に連動したワークショップが実現しました。

(浅見俊哉 / SMF協力委員)

どろせん始動!!〈ドローイング1000まいプロジェクト〉

11月23日 埼玉県立近代美術館創作室・北浦和公園 ほか

画家(埼玉大学教授)小澤基弘さんを講師に迎え、「うまい下手よりも大切なものがある」をテーマに、ドローイング体験プログラムを行いました。高校生を中心に、大学生から小学生まで30人が参加し、600点以上のドローイング作品を描きあげました。



自分自身が描き、展示をしたドローイング作品にしばしば見入り、そこに現れたイメージを小澤さんと振り返る時間が設定されました。この時、参加者は、これまで気づかなかったもう一人の自分と出会う体験ができたようです。どの参加者も、「思いがけない体験ができた」「とても楽しかった。家でも描き続けます」と口々に笑顔で感想を述べていました。

今回のプログラムで生まれた作品は、当日の活動風景写真とともに館内、屋外に展示されました。関心を持った方々が、館内に展示された作品や活動の様子を見学に来られました。

また、12月に当館で開催された埼玉県高校美術展の開催期に、当日の様子をビデオで上映するとともに、作品の展示を行いました。多くの方々にプログラムに対して関心を持っていただくことができました。今後も継続する計画です。

(山水明 / 埼玉県立近代美術館)

